

『蜻蛉日記』下巻「養女求婚記事」の「ほととぎす」

— 上巻との照応 —

庄司敏子

一、はじめに

『蜻蛉日記』下巻でもっとも「物語」あるいは「説話的」であるとされてきた記事に、天延二年の養女求婚記事^①がある。この記事については多くの論が提示されてきたが、特にここ数十年は道綱母と遠度との「男女の交渉」について盛んに論じられているほか、養女求婚記事が下巻執筆の重要な要素であったと評価する論も散見される^③。近年では遠度の求婚作法から一連の記事を読みとろうとした^④り、贈答歌に注目することで「結婚忌避」の心情を考察したりする^⑤ような新たな方法も提示されてはいるものの、大半の議論が、上巻の序に集約されている『蜻蛉日記』の主題とみなされてきたものと整合性を考えるものであった。

しかし、『蜻蛉日記』下巻について、一貫する作品の主題というものをも前提とした読解がどこまで妥当なのかは疑問である。なぜな

ら、『蜻蛉日記』下巻の記事は上巻及び中巻と比較して内容が多様化し、また人間関係も複雑化するため、道綱母と兼家との関係のみに回収しきれないような問題がどうしても残されてしまうからである。この養女求婚記事についても、上巻冒頭の序に縛られない解釈の可能性を残していると思われる。

本稿ではこのような観点から、養女求婚記事における遠度の和歌を中心に検討することで、主に表現面、構成面における上巻との関わりを改めて指摘していきたい。遠度の和歌は日記中に全五首が収められているが、中でも道綱母とのやりとりに注目すると、そのすべてに、上巻の早い時期に収められた和歌およびその周辺の表現との対応が見られる。構成面では、両者ともに「ほととぎす」を用いた贈答を経て求婚がなされ、「なげきつつ」という初句をもつ歌で男女の関係に危機が訪れるという点に注目する。このように見ると、養女求婚記事は従来論じられてきた以上に上巻の世界を強く踏まえたものであり、遠度の和歌はその部分的再現を図っていると

さえ言えそうである。とはいえ、求婚をめぐる滑稽とも言うべき騒動の中で、遠度の和歌は上巻の世界をなぞりつつも、それをいわば諧謔的なものに変換していくような形で日記中に配列されていると考えられるのである。

なお、この議論をするにあたり、上巻成立の時期と流布の範囲について言及しておく必要がある。上巻の執筆および成立については、先学により幾度も議論がなされているにもかかわらず決定的な説を見ないが、有力な説としては安和二年の高明追放を契機として執筆された想定するもの、天禄二年の鳴滝籠りを契機として執筆された想定するものなどがある。いずれにせよ、上巻の執筆開始を天禄三年以降と想定するものは少ない。また、上巻に関しては個別的成立説が有力であるが、その場合、数カ月ないしは半年程度の執筆期間があったものと推定されている。つまり上巻は、下巻に収められた最初の年である天禄三年までには成立していたとの想定が優勢であり、論者もこの想定は妥当であると考えている。流布の範囲については、これもはっきり結論づけることはできないのだが、遠度あるいは兼通のように、権力に近い場にいた人々およびその周辺で享受されていた可能性を積極的に考えてよいのではないか。つまり、養女求婚が行われた時期、和歌を贈った遠度が上巻の内容を知っていたと想定しうるのである。そう考えると、遠度が自ら上巻をもどくような和歌を詠み、またそれを受け取った作者はより対応のわかりやすい歌の配列を意識してこの記事を構成したのではない

かという推測も可能であろう。

二、「養女求婚記事」における和歌の配列

まず、以下に遠度の和歌全五首を引用しておく。本稿で特に検討するのは **B**、**C**、**E** の記事である。

A ……そのほどに雨降れど、いとほしとて出づるほどに、文取りて帰りたるを見れば、紅の薄様一襲にて、紅梅につけたり。ことばは、「石上」といふことは知ろしめしたらむかし。

春雨にぬれたる花の枝よりも人知れぬ身の袖ぞわりなき

あが君、あが君。なほおはしませ」と書いて、などにかあらむ、「あが君」とある上はかい消ちたり。

(天延二年二月、三二六)

B ……「よしよし、かう夜昼まゐり来ては、いとどはるかになりなむ」とて、入らで、とばかり助と物語して、立ちて、硯、紙と乞ひたり。出だしたれば、書きて、おしひねりて入れていぬ。見れば、

「ちぎりおきし四月はいかにほととぎすわがみのうきにか

けはなれつつ

いかにしはべらまし。屈しいたくこそ。暮にを」と書いたり。手もいと恥づかしげなりや。返りごと、やがて追ひて書く。

なほしのべ花たちばなの枝やなきあふひすぎぬる四月なれ

ども

(天延二年四月、三三三～三三五)

C……まだつとめて、「いとあやにくに、松明とものたまはせて
帰らせたまふめりしは、たひらかにやと聞こえさせになむ。

ほととぎすまたとふべくも語らはでかへる山路のこぐら
かりけむ

こそいとほしう」と書いてものしたり。さしおきてくれば、か
れより、

「とふ声はいつとなけれどほととぎすあけてくやしきもの
をこそ思へ

と、いたうかいこまりたまはりぬ」とのみあり。

(天延二年四月、三三七)

D……夜さへかけてやまねば、えものせで、「情なし。消息をだ
に」とて、「いとわりなき雨に障りてわびはべり。かばかり、

たえずゆくわがなか川の水まさりをちなる人ぞ恋しかりけ
る」

返りごと、

あはぬせを恋しと思はば思ふどちへむなか川にわれをすま
せよ

などあるほどに、暮れはてて、雨やみたるに、みづからなり。

(天延二年五月、三四五～三四六)

E……まだしきにかれより、「さまかはりたる人々ものしはべり

しに、日も暮れてなむ、使ひもまゐりにける。

なげきつつ明かし暮らせばほととぎすみのうのはなか
げになりつつ

いかにしはべらむ。今宵はかしこまり」とさへあり。返りごとは、
「昨日かへりにこそはべりけめ。なにか、さまではとあやしく、

かげにしもなどかなるなむうの花の枝にしはぬ心とぞ聞
く」

とて、上かい消ちて、端に、「かたはなるこちしはべりや」と
書いたり。

(天延二年五月～六月、三四九～三五〇)

次に、当該記事において遠度の和歌がどのような位置に置かれて
いるのかを見ておきたい。左に挙げるのは、天延二年二月から同年
十月までの中心的な記事を整理したものである。先に引用した遠度
の和歌が詠まれた時期をあわせて記している。

二月 結婚の承諾をめぐる手紙

三月 結婚の日取りをめぐる手紙

四月 遠度来訪

結婚の日取りをめぐる手紙

〈道綱母と兼家との手紙のやりとり

〈道綱母と遠度との手紙

五月 〈端午の節句の様子

遠度と道綱とのやりとり

C B

後掲 I

後掲 G

後掲 H

D

〈兼家と道綱母との手紙をめぐる事件 後掲J〉

五月から六月 遠度からの手紙

E

七月 破談、遠度からの手紙

十月 兼通からの手紙

こうして遠度の和歌全五首の配列を確認すると、二月の求婚開始から七月の破談直前までに置かれていることがわかる。つまり、養女求婚の展開に沿って、遠度の和歌も配置されているのである。

Aの和歌が詠まれたのは求婚のはじめである。ここには上巻と類似するような表現は見られず、この時点で道綱母側から遠度への求婚に対する返答もまだない。次のBは道綱母に対する詠みかけだが、ここで「ほととぎす」という語を使うことで、上巻の求婚を想起させる形になっている。つまり、ここから上巻の求婚記事のはじまりと対応しているとも考えられるのである。また、Eの記事は、結婚が破談になってしまう少し前におかれている。正確には、Eの記事のあと遠基の死が遠度から伝えられ、直後に七月の記事にうつるといふ形だが、このEが結果的には求婚の最終段階であるという見間違いはない。こうした求婚記事の終末部に「なげきつつ」という上巻を思わせるような表現を含む和歌が置かれていることから、上巻の兼家による求婚を想起させるような構成意識をくみ取ってよいのではないか。

では、それを確認するため具体的な表現の検討に入りたい。

三、「ほととぎす」の場面

『蜻蛉日記』における「ほととぎす」については、すでに諸氏により論じられている。西木「一九六八」は日記中の全用例について検討し、「贈答歌のすべてに季節感覚としての「ほととぎす」が詠み込まれて」いることを指摘した。一方、神尾「二〇〇四」は「ほととぎす」について、「とくに、その鳴き声は男性からの五月の求愛、あるいは、その求愛に応じる女君を映像とする」と考察する。この神尾論文は下巻の「ほととぎす」が上巻の兼家からの求婚を想起させるものであると首肯できるが、下巻については、女君が求愛に応じることがないため、上巻の型とは異なるものであると論じるにとどまっている。この点については、さらなる検討を要するのではないか。三田村「一九九一」においても下巻の「ほととぎす」について言及がなされるが、下巻では「作者道綱母によって統御されざる感覚の反乱を描く」というように、作者の意識に回収した議論となっている点に再考の余地がありそうだ。近年では赤間「二〇〇九」において、下巻での「ホトトギス詠者」は「兼家に代わる」ものであり、それは道綱母が兼家との贈答歌による交渉を諦めたときにあらわれたのだとする、兼家との関係性を強く意識した読みも提示されている。

これらの先行研究では、下巻における「ほととぎす」に関する言

及はあるものの、「養女求婚記事」中での「ほととぎす」の役割、あるいは上巻冒頭の場面との対応という点は深く追究されてはこなかった。そこで、本節では求婚記事中の「ほととぎす」と上巻冒頭場面との対応を考察してみたい。なお、比較の際には和歌の表現の類似、散文中の語彙の類似など、複数の観点から幅広く検討していくこととする。

まず、『蜻蛉日記』中の「ほととぎす」全用例について整理しておく。上巻では本節で比較対象とする、後掲の贈答における二例のみ、中巻ではあい宮への長歌中に一例と天禄二年の山籠りに一例の計二例しかない。対して、下巻になると「ほととぎす」の用例は増加し、全一一例を数える。その内訳は、天禄三年五月に一例、天延元年五月の道綱と大和だつ人との贈答に二例、天延二年の養女求婚記事中に八例となっている。ここから、養女求婚記事中の八例は突出していることが明らかである。下巻の求婚記事において「ほととぎす」が大いに意識されていることは間違いないだろう。

では、養女求婚記事で「ほととぎす」が用いられている場面と、上巻の序に続く冒頭場面とは具体的にどのように対応しているのだろうか。詳細に見ていきたい。

〈上巻〉

[F]さて、あへなかりしすぎごとどものそれはそれとして、柏木の木高きわたりより、かく言はせむと思ふことありけり。例の人は、案内するたより、もしはなま女などして、言はする

ことこそあれ、これは、親とおほしき人に、たはぶれにもまめやかにほめかかししに、便なきことと言ひつるをも知らず顔に、馬にはひ乗りたる人して、うちたたかす。誰など言はするは、おぼつかなからず騒いだれば、もてわづらひ、取り入れてもて騒ぐ。見れば、紙なども例のやうにあらざ、いたらぬところなしと聞きふるしたる手も、あらじとおぼゆるまで悪しければ、いとぞあやしき。ありける言は、

音にのみ聞けばかなしな ほととぎす こと語らはむと思ふ心あり

とばかりぞある。「いかに。返りことはすべくやある」など、さだむるほどに、古代なる人ありて、「なほ」とかしこまりて書かすれば、

語らはむ人なき里に ほととぎすかひなかるべき声なふるしそ

(天曆八年夏、九〇〜九一)

右の記事が、上巻で唯一見られる「ほととぎす」の場面である。求婚記事 [B]、[C]、[E] と比べたとき、注目される類似箇所に囲みを付した。和歌から検討すると、「ほととぎす」のモチーフの共通性だけでなく、上巻 [F] で兼家からの贈歌にある「こと語らはむ」および道綱母の答歌「語らはむ人なき里」と、養女求婚記事 [C] における道綱母の贈歌「語らはで帰る山路」の対応が指摘できる。ほととぎすを「語らふ」ものとして擬人化する詠みぶりは『後撰集』

頃から出てきたようであり、『古今和歌六帖』にも三例が見られる。また、兼家の異母弟である高光の出家を素材とした『多武峯少将物語』にも三例がある。しかし、必ずしも求愛の場面でのみ擬人化の方法がとられるというわけではなかったようで、「あはれなることかたらひてほととぎすもろごゑにこそなまほしけれ」（『多武峯少将物語』・一四・式部卿の北の方）などは女性から女性への歌である。こうしたなか、『蜻蛉日記』中の二場面三例がいずれも求婚の文脈に置かれていることは、両場面の対応関係を認める要素となりうるだろう。

さらに[F]の散文の部分にも目を向けると、「いたらぬところなしと聞きふるしたる手も、あらじとおほゆるまで悪しければ」と兼家の筆跡について否定的な評価を下しているのに対して、養女求婚記事[B]では「手もいと恥づかしげなりや」という評価を速度の筆跡に与えている。これも、二つの求婚記事の類似箇所として指摘しておきたい。たしかに、男からの手紙が届けられる場面での筆跡について記すのは常套かもしれないが、速度の筆跡に対する評価は[A]における最初の手紙に対するものではないという点に注意したい。つまり、[B]の「ほととぎす」の歌を含む手紙の中で「手」についての言及をしているところに、上巻を意識した可能性を考慮することができるのである。また、兼家と速度との「手」に対する評価を反転させることで、兼家と速度との差異をほのめかしている可能性も考えられようか。

さて、先述したように、養女求婚記事中には和歌以外にも「ほととぎす」の用例が見られる。以下にすべてを挙げる。

[G]頭の君、なほこの月のうちには頼みをかけて、責む。このごろ、例の年にも似ず、「ほととぎす館をとほして」といふばかりに鳴くと世に騒ぐ。文の端つかたに、「例ならぬほととぎすのおとなひにも、やすき空なく思ふべかめり」と、かしこまりをはなはだしうおきたれば、つややかなることはものせざりけり。
(天延二年四月、三四一)

[H]昨日の雲かへす風うち吹きたれば、あやめの香、はやうかかえて、いとをかし。簀子に助と二人ゐて、天下の本草を取り集めて「めづらかなる薬玉せむ」など言ひて、そそくりゐたるほどに、このごろはめづらしげなう、ほととぎすの、群鳥廁におりゐたるなど、言ひののしる声なれど、空をうちかけりて二声三声聞こえたるは、身にしみてをかしうおほえたれば、「山ほととぎす今日とてや」など言はぬ人なうぞ、うち遊ぶる。すこし日たけて、頭の君、「手番にものしたまはば、もろともに」とあり。「さぶらはむ」と言ひつるを、しきりに「おそし」など言ひて人來れば、ものしぬ。

(天延二年五月、三四四)

この二つの記事はいずれも先の[C]と[D]との間にあり、速度を「ほととぎす」になぞらえている。[G]では養女との結婚を迫る速度の姿を響かせ、「例ならぬほととぎすのおとなひ」などと言っている

のである。Hは五月五日の記事であるが、ここでも「このごろはめづらしげ」ではなくなった「ほととぎす」の様子を描写しており、これも速度のたびたびの求婚を示していると解釈できる。新全集（木村・伊牟田「一九九五」）では「ほととぎす」はまた、待つても来ない兼家の訪れ（略）を想起させる」と解釈するが、それでは「めづらしげなう」の意味が通らない。速度も「かくて、月はてぬれば、はるかになりはてぬるに、思ひ憂じぬるにやあらむ、おとなうて月たちぬ」（天延二年五月、三四二）とあるので訪れは少なくなっていたであろうが、その後五月四日には道綱のもとに手紙をよこすので、やはりHの「ほととぎす」は求婚者である速度を連想させると考えるべきである。

ところで、先に挙げたGの直前には、道綱母と兼家とのやりとりが見られる。これは求婚記事の後、天延二年十月に収められた兼通の記事へと連なる重要な記事である。以下に本文を挙げる。

Iかくてなほおなじごと絶えず、殿にもよほしきこえよなど、つねにあれば、返りごとも見せむとて、「かくのみあるを、こには答へなむわづらひぬる」とものしたれば、「程はさものしてしを、などかかくはあらむ。八月待つほどは、そこにびしうもてなしたまふとか、世に言ふめる。それはしも、うめきも聞こえてむかし」などあり。たはぶれと思ふほどに、たびたびかかれば、あやしう思ひて、「ここにはもよほしきこゆるにはあらず。いとうるさくはべれば、『すべてここにはの

たまふまじきことなり』ものしはべるを、なほぞあめれば、見たまへあまりてなむ。さて、なでふことにもはべるかな。

いまさらにかなる駒かなつくべきすさめぬ草とのがれに
し身を

あなまばゆ」とものしけり。

（天延二年四月、三四〇～三四一）

末尾の「いまさらに」の歌は、速度との関係を疑う兼家に対して道綱母が詠んだものである。この記事がGの直前に収められていることは、道綱母、兼家、速度の関係を考える上で無視しがたい。I、Gの記事の配置は、養女に求婚するという形をとりながらも、表現上はあたかも道綱母との男女の関係をにおわすような速度の姿と、その様子に対してひやかすような文をよこす兼家の姿とを浮かび上がらせている。このような人物関係の描き方は、上巻よりも複雑化した人物の関係を、諧謔味を帯びた形で表現しているようである。

なお、Iの「いまさらに」の歌は、兼通と道綱母、兼家、速度らとの具体的な関係および下巻の中での関わり方、あるいは『蜻蛉日記』の表現世界の特質を考える上で非常に重要である。「いまさらに」詠が伝達していく過程とその結末についてここで確認しておきたい。

J「いかなることにかはべらむ。いかでこれをだにうけたまはらむ」とて、あまたたび責めらるれば、げにとも知らせむ、こ

とばにては言ひにくきをと思ひて、…(中略)…かたはなべきところは破り取りてさし出でたれば、簀子にすべり出でて、おぼろなる月にあてて、久しう見て入りぬ。「紙の色にさへ紛れて、さらにえ見えたまへず。昼さぶらひて見たまへむ」とてさし入れつ。…(中略)…これなること、ほのかにも見たり顔にも言はで、ただ、「ここにわずらひはべりしほどの近うなれば、つつしむべきものなりと人も言へば、心細うもののおぼえはべること」とて、をりをりにそのことも聞こえぬほどにしひびてうち誦ずることぞある。…(中略)…

昨夜見せし文、枕上にあるをみれば、わが破ると思ひしところはことにて、また破れたるところあるは、あやし、と思ふは、かの返りごとせしに、「いかなる駒か」とありしことの、とかく書きつけたりしを、破り取りたるなべし。

(天延二年五月、三四七―三四八)

このJは、養女との結婚を急かす遠度に兼家からの手紙の文言を見せようとした道綱母が、誤ってI「いまさらに」詠の部分破り取って見せてしまうという記事である。手紙を「破る」という行為自体にも注意される箇所であろう。続けて挙げるKは、I、Jの後日譚とも言うべき記事の一節である。

K…書いたることは、「かの『いかなる駒か』とありけむはいかが、

霜枯れの草のゆかりぞあはれなるこまがへりてもなつて

しがな

あな心苦し」とぞある。わが人に言ひやりて、くやしと思ひしことの七文字なれば、いとあやし。

(天延二年十月、三五四―三五五)

Kの年時、天延二年十月は遠度による求婚が破談になった約三ヵ月後である。Kの記事は、兼家の兄で当時太政大臣であった兼通から、I「いまさらに」詠を踏まえた和歌が書かれた手紙が送られてくるというもので、結局は兼通が和歌の下の句を上手く作ることができないという滑稽なエピソードで終わる。

これらI、J、Kの一連の記事については、すでに川村裕子氏による一連の論がある。川村論文では養女求婚記事中に収められた手紙を「恋の糸口や発端を見せながら消え去ってしまう」「奇妙な手紙」であると位置づけ、そこに「いまだに絶えることのない兼家の存在」を読みとっている。養女求婚記事中に置かれた手紙を「奇妙」であると捉える観点は首肯できるが、この「奇妙」さを上巻の序に記されたような主題、すなわち兼家との関係性をめぐる問題に回収してゆくような読みの姿勢は果たして妥当なのだろうか。

この一連の「奇妙な手紙」にかかわる騒動もまた、養女求婚記事の諧謔性を形作る大きな要素となっているのではないかと思われるのである。さらにこの「奇妙」な事態は、『蜻蛉日記』そのものの流布、あるいは読者との関わりといった、より大きな問題とからめて検討されるべき重要性を有しているのではないか。「いまさら

に」詠および求婚記事中の手紙の問題については、紙幅の都合上、別の機会に論じることとする。

四、「なげきつつ」の贈答

続けて、上巻との関連性が特に強いと思われる表現として、「なげきつつ」を初句とする和歌について検討していく。『蜻蛉日記』中には「なげきつつ」を初句に持つものが三例あり、一例は[E]の速度による和歌である。残りの二例はともに上巻に見られ、しかもいずれも早い時期に置かれている。

〈上巻〉

[L] かくて、十月になりぬ。ここに物忌なるほどを、心もとなげ

に言ひつつ、

なげきつつかへす衣の露けきにとど空さへしぐれ添ふ

らむ

返し、いと古めきたり、

思ひあらば干なましもをいかでかはかへす衣の誰も濡る

らむ

とあるほどに、わが頼もしき人、陸奥国へ出で立ちぬ。

(天曆八年十月、九六)

[M] これより、夕さりつかた、「内裏にのがるまじかりけり」とて

出づるに、心得で、人をつけて見すれば、「町の小路なるそこ

そこになむ、とまりたまひぬる」とて来たり。さればよと、

いみじう心憂し」と、思へども、いはむやうも知らであるほど

に、二三日ばかりありて、あかつきがたに門をたたく時あり。

さなめりと思ふに、**憂くて**、開けさせねば、例の家とおぼし

きところにもものしたり。つとめて、なほもあらじと思ひて、

なげきつつひとり寝る夜のあくるまはいかに久しきもの

とかは知る

と、例よりはひきつくりろひて書きて、移ろひたる菊にさしたり。返りごと、「あくるまでもころみむとしつれど、とみなる召使の来あひたりつればなむ。いとことわりなりつるは。

げにやげに冬の夜ならぬ真木の戸もおそくあくるはわびし

かりけり」

さて、いとあやしかりつるほどに、ことなしびたる、しばしは、忍びたるさまに、内裏になど言ひつつぞあるべきを、いとどしう心づきなく思ふことぞ、かぎりなきや。

(天曆九年十月頃、一〇〇〇—一〇〇一)

[L] は兼家からの贈歌が初句「なげきつつ」と据えられている、結婚成立後早い時期の贈答場面である。兼家歌ということで、速度がもどくにふさわしい和歌とも言えるかもしれない。[M] は言うまで

もなく、『拾遺集』以下の勅撰集にたびたび入集し、『百人一首』に

も採られることになる歌である。養女求婚記事[E]と比較したとき、

詠みぶりがより近いのは「なげきつつ夜を過ごす」という意が一致

するMであろう。また、語句のレベルで確認すると、Mの散文中に見られる「いみじう心憂し」あるいは「憂くて」といった語が、養女求婚記事Eの和歌における「みのうのはな」と対応している可能性も指摘しておく。

初句を「なげきつつ」と置く用例は、先行歌および同時代歌ともにあまり残されていない。あわせて、EおよびMに見られた「なげきつつ夜を過ぐす」という詠みぶりも、現在確認できる限りでは『能宣集』、『うつほ物語』の各一例のみであり、この表現は当時数多く用いられていたものと想定することは難しい。こうした同時代にあまり見られない表現が『蜻蛉日記』中で上巻、下巻・養女求婚記事の二箇所に見られることには注意してよいだろう。以上より、養女求婚記事Eにおける速度の和歌は、上巻、特に兼家による求婚から結婚成立までの和歌を意識して作られたと想定することが可能である。

なお、ここで養女求婚記事BおよびEにおける速度の和歌について見ておきたい。それぞれの下の句を比較してみると、かなり類似するものであることがわかる。

B わがみのうきにかげはなれつつ

E みのうのはなのかげになりつつ

「みのう」「かげ」「……つつ」という表現の一致は、なにか下敷きになるような和歌あるいは型があり、それに則ったものとも思われる。「かけはなれつつ」の先行する用例は管見の限りでは見当たらず

ないが、「かげになりつつ」については、『古今和歌六帖』一〇五〇「もり」に、「きみこふとわれこそむねをこがらしのもりとはなしにかげになりつつ」の用例がある。推測の域を出ないが、もし速度がこのような類の歌を下敷きにしたと想定できるのであれば、Eではそれに上巻の「なげきつつ」をも踏まえようとしたため、「なげきつつ……つつ」という不自然な詠みぶりになったものとも考えることが可能なのではあるまいか。

五、おわりに

養女求婚記事が上巻の兼家からの求婚を想起させることは従来も触れられてはきた。しかし、そこから兼家を強く意識した、上巻の序に集約される『蜻蛉日記』の主題へと還元させようとする試みが主流であった。たしかに、速度に関する描写が上巻の兼家を想起させることは否定できないのではあるが、それが直ちに道綱母と兼家との関係のみへと収斂するかというと、そうではないだろう。下巻では、上巻以上に複雑化した人物関係があらわれている。それも、道綱、養女、速度、兼通など、道綱母および兼家にかなり近い人物ばかりでありながら、その込み入った人物関係が主に手紙のやりとりに関してあらわれているのである。たとえば、速度の求婚の対象は養女でありながらも、記事中に養女は不在であり、速度の求婚の手紙は道綱母に宛てられているようにも見えるというような事態で

ある。こうした状況を念頭に置いたとき、養女求婚記事は上巻の世界を踏まえつつも、上巻の序に記された『蜻蛉日記』の主題とみなされてきたものから離れていく下巻独自の世界へと変換されていると思われるのである。

その際、速度の和歌に作者がどの程度手を入れたのか、あるいは入れなかったのか、そもそもすべてが作者の手によるものなのか、検証が不可能な点ではあるが、ひとまず速度の詠作があったと仮定すると、やはり速度自身が『蜻蛉日記』上巻を読んでいたのである。上巻の兼家をもどくように「ほととぎす」の和歌を詠み、それが作者の手によって養女求婚記事中で大きく機能することとなったと推察される。しかし、作品の成立および享受という大きな問題を含み持つため、この点についてはさらに慎重な検討が必要である。

以上、『蜻蛉日記』養女求婚記事における「ほととぎす」およびその周辺の表現は、上巻の早い時期の和歌を強く踏まえて作られたものであることを明らかにしてきた。養女求婚記事には、兼通の登場に繋がる一連の「いまさら」詠関連記事、手紙およびそれに付随する兼家の言葉の伝達の問題など、まだ論じるべき点が多く残されている。引き続き、養女求婚記事をはじめ『蜻蛉日記』下巻の方法について検討していきたい。

注

(1) 倉田「二〇〇六c」の「従来、この部分は「速度求婚譚」として把握さ

れているが、物語での用法、すなわち『うつほ物語』の「あて宮求婚譚」、『源氏物語』の「玉鬘求婚譚」などとする把握の仕方に倣い、以下、「養女求婚譚」として理解していきたい」との指摘を参考にし、さらに物語・説話の語型を示す際に用いられる「……譚」という語を避けて、「養女求婚記事」と呼ぶこととする。

(2) 主なものに、石坂「一九八二」、川村「一九八四」、守屋「一九九二」、大内「一九九三」、金子「一九九三」、川名「二〇〇〇」などがある。

(3) 主なものに、古賀「一九七二」、篠塚「一九九〇」、林「一九九二」などがある。

(4) 倉田「二〇〇六a」および倉田「二〇〇六b」。

(5) 内野「二〇〇八」。

(6) 『後撰集』には、「いかにして事かたらはん郭公歎のしたになげばかりなし」(恋六・一〇二〇・よみ人しらず)の用例がある。なお、安倍「一九九六」でも詳しく検討がなされている。

(7) 川村「一九九六」、川村「二〇〇三」および川村「二〇一〇」。

(8) 『能宣集』三三三

又、おなじやうなる人に

なげきつつあかしわびぬるふゆのよをみじかきものとしらせてしかな

『うつほ物語』「国譲下」うへ(今上) 九二四

なげきつつふるよもあれどあさばらけおきつるしものわびしかりつる

〈参考文献・引用文献〉

○赤間恵都子「二〇〇九」 「ホトトギスを持つ女——道綱母の和歌へのこだわり——」日記文学研究会編『日記文学研究 第三集』新典社

○安倍泰子「一九九六」 「ほととぎすかたらひしつ」考 『尚綱大学研究 紀要』18 尚綱大学

○石坂妙子「一九八一」 「世の中」の変容②——速度求婚譚 『文芸研究』

97 日本文芸研究会

- 内野信子「二〇〇八」『蜻蛉日記』下巻の構成——和歌表現を視点として——『国学院大学院紀要 文学研究科』40
- 大内英範「一九九三」『蜻蛉日記』下巻の一考察——遠度の養女求婚記事をめぐる——『日本文学論究』52 国学院大学国文学会
- 金子富佐子「一九九三」『蜻蛉日記』下巻試論——遠度求婚の記事の方法——『日記文学研究 第一集』新典社
- 神尾暢子「二〇〇四」『蜻蛉時鳥の鳴声映像』『学大国文』47 大阪教育大学 国語教育講座・日本アジア言語文化講座
- 川名淳子「二〇〇〇」『男と女の媒体としての「女絵」——『蜻蛉日記』下巻「女絵」の記事から——』『論集日記文学の地平』新典社
- 川村裕子「一九八四」『蜻蛉日記』下巻の一考察——遠度求婚譚をめぐる——『立教大学日本文学』52
- 川村裕子「一九九六」『蜻蛉日記』の文——平安時代の文の交換を中心に——『立教大学日本文学』77
- 川村裕子「二〇〇三」『蜻蛉日記』下巻「遠度求婚譚」の文を読む』伊藤博・宮崎莊平編『王朝女流文学の新展望』竹林舎
- 川村裕子「二〇一〇」『王朝文化と手紙——『蜻蛉日記』下巻の奇妙な手紙——』秋澤互・川村裕子編『王朝文化を学ぶ人のために』世界思想社
- 木村正中・伊牟田経久「一九九五」『新編日本古典文学全集 土佐日記 蜻蛉日記』小学館
- 倉田 実「二〇〇六a」『蜻蛉日記』の養女求婚譚』『大妻女子大学紀要——文系——』38 (↓倉田「二〇〇六c」)
- 倉田 実「二〇〇六b」『蜻蛉日記』道綱母と藤原遠度』『大妻国文』37 (↓倉田「二〇〇六c」)
- 倉田 実「二〇〇六c」『蜻蛉日記』の養女迎え』新典社
- 古賀典子「一九七二」『蜻蛉日記』下巻の問題点に就いて——天延元年冬の記事を中心に——』『国語と国文学』580
- 篠塚純子「一九九〇」『蜻蛉日記』の主題をめぐる』今井卓爾監修『女

流日記文学講座 第二巻 蜻蛉日記』勉誠社

○西木忠一「一九八六」『ほととぎす』考——『蜻蛉日記』における——』

『愛知学院大学論叢(一般教育研究)』33-3 愛知学院大学

○林美喜江「一九九二」『蜻蛉日記』下巻の終結』『文学・史学』14 聖心

女子大学

○三田村雅子「一九九二」『驚かず声——蜻蛉日記・麻痺と覚醒の構図——』

『玉藻』27 フェリス女学院大学国語国文学会

○守屋省吾「一九九二」『蜻蛉日記』下巻考——遠度求婚の経緯をめぐる——』

木村正中編『論集日記文学 日記文学の方法と展開』笠間書院

※本文は宮内庁書陵部蔵桂宮本(桂宮本蜻蛉日記)笠間書院一九八二を

翻刻し、私に校訂したものである。なお、引用の後の括弧内に年時および新

全集のページ数を示している。

※和歌の引用は、『新編国歌大観』(角川書店)に拠る。